

## 広島県芸北町臥竜山におけるミヤマホオジロの繁殖生態について

上野 吉雄<sup>1)</sup>・河津 功<sup>2)</sup>・保井 浩<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 広島県立広島北養護学校・<sup>2)</sup> 株式会社ニチエイ・<sup>3)</sup> 日本ユニシス株式会社

Breeding Ecology of the Yellow-throated Bunting *Emberiza elegans* in Mt. Garyu,  
Geihoku-cho, Hiroshima Prefecture

Yoshio UENO<sup>1)</sup>, Isao KAWAZU<sup>2)</sup> and Hiroshi YASUI<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> Hiroshima-Kita School for the Mentally Retarded Faculty of Education, Hiroshima 731-02,

<sup>2)</sup> Nichiei Co. Ltd, 22-8 saiwai-cho, Naka-ku, Hiroshima 730 and

<sup>3)</sup> Nippon Unisys Co. Ltd, 2-7-10 Otemachi, Naka-ku, Hiroshima 730

**Abstract:** The finding of eggs of yellow-throated bunting, *Emberiza elegans*, of May 1996 at Mt. Garyu in Hiroshima Prefecture, was the first record in Japan. Subsequent research revealed some hitherto unknown aspects of the breeding ecology of this species. Only the female carried out nest-building, on the other hand, the male stayed near by without participating. The female laid 5 eggs, and both sexes cooperated with incubation. The size of the egg was 17.5 mm × 13.8 mm, and it had dark brown spots scattered on the greyish white surface. The birds incubated for 13 days, and both male and female showed injury-feigning behaviour when disturbed. The habits of the yellow-throated bunting in respect of nesting, songs and incubation, as well as the size and the color of the egg, strongly resemble those of the Japanese yellow bunting, *E. sulphurata*, and differ from the other species belonging to *Emberiza* occurring in Japan.

© 1997 Geihoku-cho Board of Education. All rights reserved.

### はじめに

ミヤマホオジロ *Emberiza elegans* はウスリー川流域・中国東北部・朝鮮半島などで繁殖し、西日本に冬鳥として数多く渡来し越冬することが知られている。国内における繁殖の記録は対馬において1967年5月に巣立ち直後の幼鳥5羽が確認されている(日本鳥学会 1974, 鴨川・山口 1976)。その後、1993年に広島県の臥竜山において本州で初めてミヤマホオジロの巣と雛が確認された(上野ら 1995, 1996)。

筆者らは、1996年に同じ臥竜山で国内ではじめてミヤマホオジロの卵を確認した。さらに、繁殖生態についても若干の知見を得たので報告する。なお、本稿は1996年度日本鳥学会大会(沖縄)においてポスター発表された。

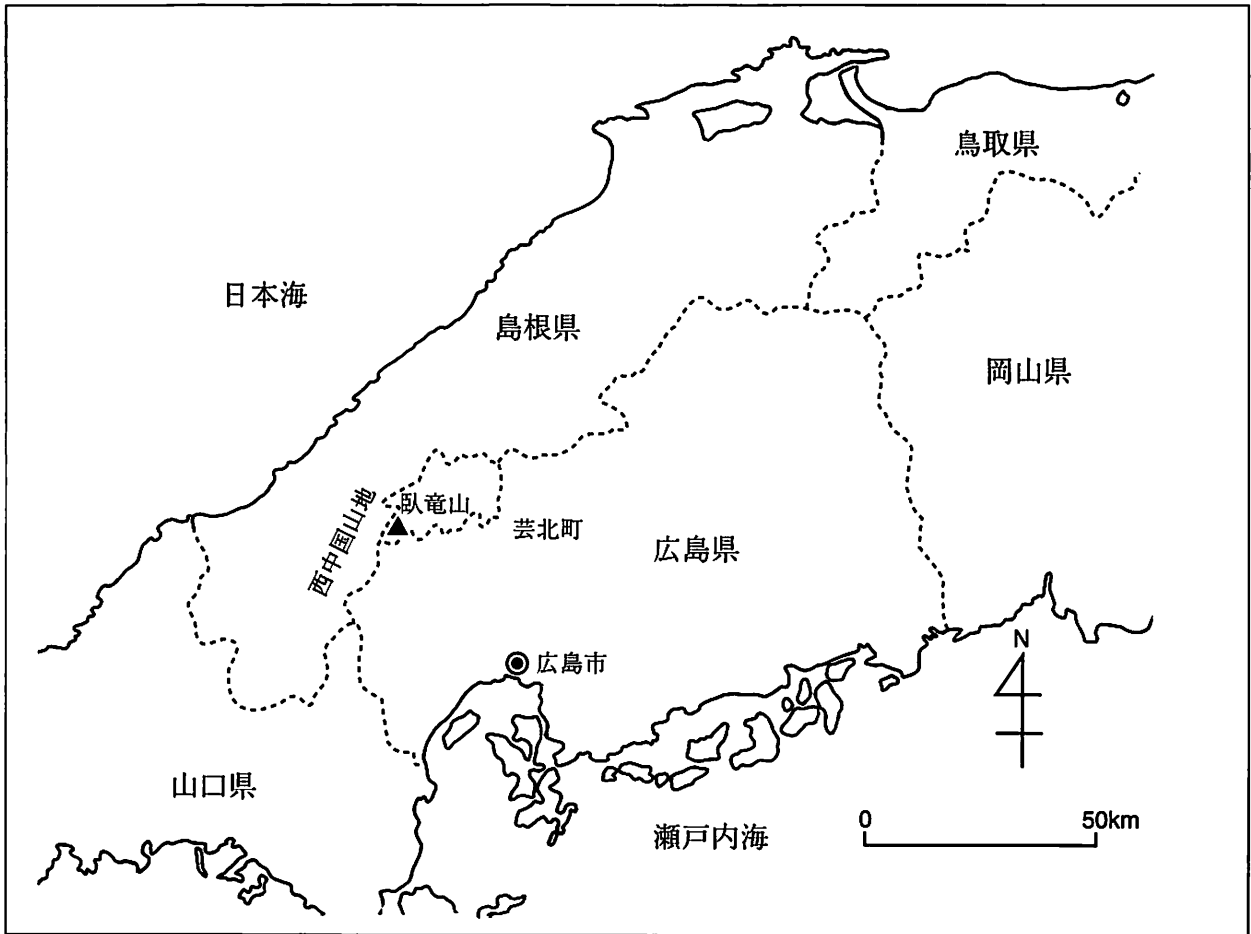


図1 調査地の概略図

### 調査地

臥竜山（西中国山地， $34^{\circ}41' N$ ， $132^{\circ}10' E$ ，1,223m）は広島県北西部に位置し（図1），山頂部にはブナ *Fagus crenata* 原生林が見られる。ミヤマホオジロが繁殖していたのは，海拔約850mの山麓部である。植生は高木および亜高木層としてアカマツ *Pinus densiflora*・コナラ *Quercus serrata*・リョウブ *Clethra barbinervis* などが見られ，林床部にはチュウゴクザサ *Sasa veitchii* var. *hirsuta* が優占し，灌木は少なく比較的開けた環境である（図版1-A）。

### 調査方法

巣作り，抱卵，育雛の観察は主として双眼鏡（ $\times 8$ ）によって行った。また，行動の細かい観察をするためにビデオカメラにより無人撮影を行った。

### 結果

1996年5月4日午前7時に造りはじめの巣を確認した。巣は林道脇の斜面の窪みに造られていた。斜面は林道を作るために削りとられてできたもので，傾斜が約 $45^{\circ}$ で，高さ約5mであった（図版1-B）。巣は地上から約1mの高さにある窪みにあり，上部にはシダの一種が覆い被さっていた。巣の発見時には少

量の巢材が置かれていたので巣造り開始直後と考えられる。巣造りは雌のみが行い、雄はその間連れそっていた。雄は時々巢をのぞきに來たが、ビデオカメラの記録では巣造り行動はみられなかった。巢は3日間で完成し、5月8日に初卵が産みこまれた。

卵は17.5×13.8mmの大きさで、地色は灰白色で黒褐色の小斑が散在している(図版1-C)。以後、1日1卵ずつ産卵し、5卵を産んだ。5月12日に抱卵を開始した。抱卵は雌雄交替で行い(図版1-D)、巢に近づくと雌雄とも巢からとび出て偽傷行動を行った。5月25日に5羽の雛が孵化し(図版1-E)、抱卵日数は13日であった。5月27日には雌雄による育雛を観察した。6月1日にはすべての雛が消失しており、なにかにより捕食されたようである。その後、このつがいはほぼ同じ地域で観察され、おそらく再営巣したものと思われる。7月29日まで雄のさえずりが聞かれ、同じ日にこのつがいの行動圏から北へ約800mの地点で他の個体のさえずりを確認した。その場所は、海拔約790mの明るいアカマツ林であった。

本種の雌の冬羽には胸帯がないが、繁殖期の雌(夏羽)には雄よりは淡いが胸帯が認められた(図版1-F)。これは1993年7月に臥竜山山頂部で繁殖した雌にも認められた。

## 論 議

ミヤマホオジロの南ウスリーにおける営巣環境は灌木層のほとんどない疎なナラ純林や、オオトネリコ *Fraxinus longicuspis*、キハダ *Phellodendron amurense*、イヌエンジュ *Maackia amurensis* var. *buergeri* などの明るい単層林であり、巢は地上に造られる(Panov 1973)。朝鮮半島では、開けた林やまばらに藪のある農耕地などである(Gore & Won 1971, Austn 1972)。臥竜山における営巣環境は、1993年7月のは山頂部のブナ林中の空き地にあるヤマブドウ *Vitis coignetiae* の群落中であり(上野ら 1995)、今回観察したものは山麓部のアカマツ、コナラなどを主体とした明るい林で、林床は比較的開けた環境であった。他の1個体の生息地も明るいアカマツ林であった。これらの事から本種は林床の開けた明るい林や、森林中の空き地を営巣場所として選んでいることが明らかになった。営巣位置は、1993年7月のはハイヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* var. *nana* の枝の地上約60cmの位置に造られていたが、今回観察したものは地上に造られていた。近縁のホオジロ *E. cioides* でも繁殖期の進行とともに巢の位置が地上から樹上に移行することが報告されており(山岸 1970)、ミヤマホオジロでも同様の傾向が認められた。臥竜山においては5月上旬にはまだ樹木の葉が茂っておらず、樹上に造ると巢を隠しにくいためと考えられる。

巣作りは雌のみが行ったが、これも近縁のホオジロ・ノジコ *E. sulphurata*・アオジ *E. spodocephala* などと同様である(中村・中村 1995)。卵の大きさではミヤマホオジロが17.5×13.8mmで、ノジコが18×14mm(小林 1967)であり、卵色も灰白色の地色に黒褐色の小斑が散在する点でノジコの卵に酷似している。ホオジロの卵は大きさが21×16mm(小林 1967)と大きく、線紋がある点で異なっている。抱卵は雌雄とも行い、コジュリン *E. yessoensis*・シマアオジ *E. aureola*・オオジュリン *E. schoeniclus*・ノジコ・アオジなどと同様であり、雌のみが抱卵するホオジロ・ホオアカ *E. fucata* などとは異なる(中村・中村 1995)。

ミヤマホオジロはその営巣環境・さえずり・卵の大きさや色・抱卵習性などから総合的に判断すると、国内に生息する *Enberiza* 属のなかでノジコにもっとも似ている。臥竜山ではノジコやアオジは繁殖しておらず、このことが同じ様な営巣環境を利用するミヤマホオジロが繁殖する一因と考えられる。

雄は巣造り期、抱卵期、育雛期を通してほとんどさえずる事がなかった。本種は西日本で数多く越冬しており、西日本の他の地域でも繁殖していると思われるが、繁殖活動している雄があまりさえずらない事が、繁殖確認を困難にしている一因と考えられる。一方、雌が得られない単独の雄は繁殖期を通してさか

んにさえずることが、1995年の観察から確認された(上野ら 1996)。また、本種は主としてウスリー川流域・中国東北部・朝鮮半島・対馬などで繁殖することが知られているが、臥竜山においていつ頃から繁殖を始めたかはさだかでない。臥竜山における本種の確実な夏期の記録は、1991年7月14日に山麓でさえずりが録音されている(上野ら 1996)。それ以前の夏期の記録は見当らないので、本種が臥竜山で繁殖するようになったのはここ数年の事と思われる。本種の臥竜山における繁殖動態については、鳥類の新たな地域への定着過程をとらえるうえで興味深く、今後の調査が期待される。

### 摘 要

- 1 1996年5月に広島県の臥竜山において、国内ではじめてミヤマホオジロの卵を確認し、その繁殖生態について若干の知見を得た。
- 2 巣造りは雌のみが行い、雄はその間連れそっていた。
- 3 卵は5個産み、 $17.5 \times 13.8$ mmの大きさで、地色は灰白色で黒褐色の小斑が散在している。
- 4 抱卵は雌雄ともに行い、抱卵日数は13日で、雌雄ともに偽傷行動を行った。
- 5 ミヤマホオジロはその営巣環境・さえずり・卵の大きさと色・抱卵習性などから、国内に生息する *Enberiza* 属のなかでノジコにもっとも似ている。

### 参 考 文 献

- Austin, O. L., Jr. 1972 The birds of Korea. Bull. Mus. Comp. Zool. 101 : 1-301
- Gore, M. E. J. & Won, P. O. 1971 The birds of Korea. 450pp Royal Asiatic Soc. Korea Branch, Seoul
- 鴨川 誠・山口鉄男 1976 対馬の生物：230pp 長崎県生物学会 長崎
- 小林桂助 1967 標準原色図鑑全集 鳥：173pp 保育社 大阪
- 中村登流・中村雅彦 1995 原色日本野鳥生態図鑑〈陸鳥編〉：301pp 保育社 大阪
- 日本鳥学会 1974 日本鳥類目録改定第5版：120pp 学習研究社 東京
- Panov, E 1973 南ウスリーの鳥類3：287pp 極東鳥類研究会 北海道
- 上野吉雄・杉島 洋・保井 浩 1995 西中国山地におけるミヤマホオジロ *Emberiza elegans* の本州初の繁殖 日鳥学誌 44 : 229-230
- ・保井・浩・山本 裕 1996 広島県芸北町の鳥類 高原の自然史 1 : 291-393
- 山岸 哲 1970 ホオジロの繁殖期の生活について 山階鳥研報 6 : 103-130

1996年9月17日受付；1997年1月10日受理

### 図 版 1

- |            |     |            |
|------------|-----|------------|
| A : 生息環境   | 臥竜山 | 1996年8月    |
| B : 営巣場所   | 臥竜山 | 1996年5月    |
| C : 卵      | 臥竜山 | 1996年5月12日 |
| D : 抱卵する雄  | 臥竜山 | 1996年5月19日 |
| E : 孵化直後の雛 | 臥竜山 | 1996年5月26日 |
| F : 巣に来た雌  | 臥竜山 | 1996年5月26日 |

图版 1

